

## (2) 遺物

### 1) 中・南河内における土師器皿の変遷

#### はじめに

今回の瓜生堂遺跡の調査では、弥生土器ばかりでなく各種の中世土器もまとまって出土した。従来当地域の中世土器は供伴する瓦器碗によってその年代が与えられるのが常であった。しかし、今回の調査では瓦器碗ばかりでなく土師器皿も出土しており、この土師器皿についても編年的位置付けをする必要があると思われた。これまで土師器皿の編年は平安京を中心に行われ、その他の地域では等閑に伏されていることが多かったように思われる。畿内周辺部では独自に編年が組み立てられることが少なかったようである。そこで本稿では中南河内地域に対象範囲を限定し、主に土師器皿の平安京における年代観や、供伴する瓦器碗の編年を基幹とし、上述したこれらの地域の土師器皿の編年的位置付けを行うことを試みたい。なお基準となる瓦器碗については主に和泉型は尾上実氏<sup>(1)</sup>大和型は近江俊秀氏<sup>(2)</sup>、和泉型の暦年代は森島康雄氏<sup>(3)</sup>の編年観を参考する。

#### 研究史抄

土師器皿の編年研究はまず、平安京から大量に出土するいわゆる「京都系」から先鞭がつけられた。昭和56年、横田洋三氏は土師器皿をまず大まかに白色系と褐色系に区別したあと、A～Cのタイプに細編し、それぞれをⅠ期からⅥ期に弁別した<sup>(4)</sup>同年宇野隆夫氏は京都大学構内から出土する土師器皿ばかりでなく他の器種も入れた総合的な編年体系をまとめた<sup>(5)</sup>。またこの年、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会により平安時代から近世に至るまでの、重層的な編年研究が明らかにされた<sup>(6)</sup>。翌年伊野近富氏は文献史学の立場から土師器皿の具体的な使用法を明らかにした<sup>(7)</sup>。昭和59年、横田氏は「Bタイプ」とそれまで呼称してきた土師器皿の更なる細分化に取り組み、その製作技法を明らかにし、それにともなう編年観を示した<sup>(8)</sup>。また同年同氏はより一層詳細な土師器皿の編年案を提示した<sup>(9)</sup>。翌年、鋤柄俊夫氏は独自の編年案を展開した<sup>(10)</sup>。

昭和62年、伊野氏は新たな分類と編年案を示し、文献学的考察を行った<sup>(11)</sup>。平成6年鋤柄氏は先に提唱した氏独自の編年案をさらに補強し、古代学協会がそれまで調査した、ほぼ全ての遺物についての新たなる編年案を示した<sup>(12)</sup>。また平成8年、小森俊寛、上村憲章氏らにより、平安時代から近世に至るまでの土師器皿の体系的な編年が提示された<sup>(13)</sup>。その翌年筆者も鋤柄氏の研究を基に左京五条八町出土の土師器皿の編年を試みたことがある<sup>(14)</sup>。

一方、平安京以外に目を向けると昭和62年中南河内地域においては森島康雄氏によって神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡から出土した土器を総合的に分析し、この地域における中世土器編年の体系化を行った<sup>(15)</sup>。平成11年中井淳史氏は主として室町・戦国期の土師器皿をもちいて畿内一圈での地域色を明らかにした<sup>(16)</sup>。一方、瀬戸哲也氏等は栗栖山南墳墓群の報告に於いて土師器皿の分類を行った<sup>(17)</sup>。

#### 形式分類

以上のように研究史を概観してきたが、本稿では編年を中心に論を進めるために、ここで土師器皿の形式分類を行う。

a 形式・いわゆる「ての字」口縁を持つ皿である。形態により a 1～a 4 まで細分される。京都系、白色系である。

b 形式・「ての字」口縁を指向するが、口縁端部をつまみ、先がとがるものである。形態により b 1、～b 3 に細分される。褐色系である。

c 形式 口縁部がヨコナデによって内弯気味に立ち上がるものである。褐色系である。

d 形式・口縁部がヨコナデによって内弯気味に立ち上がるものであるが、c 形式よりもやや浅い皿状

を呈する。褐色系である。

e形式・楕形で高台が付くものである。内外面にヘラミガキを施すものもある。形態によりe1、e2に細分される。

f形式・口縁部を1~2回に亘ってヨコナデを行い、端部は尖り気味である。大皿である。

g形式・土師器皿に脚部を附加させたものである。

h形式・口縁部に2段に亘ってヨコナデを施し、内湾気味に立ち上がる大皿である。褐色系である。

i形式・口縁部を1~2回に亘って強くヨコナデを施し、段をなすものである。褐色系である。

j形式・いわゆるコースター皿である。白色系である。

k形式・扁平で口縁部をあまり意識しない皿である。褐色系である。

l形式・やや上げ底を呈し、口縁部は「く」の字に折れ、端部をつまみあげるもの。褐色系である。

m形式・口縁部と底部の境が不明瞭でヨコナデを二段に亘って施すものである。

n形式・あげ底でいわゆるヘソ皿である。指頭圧痕を多く残す。雑な作りである。内面には「の」の字状のナデ上げ痕が残る。褐色系である。

o形式・口縁部を強くヨコナデし、外面に指頭圧痕を残す。口縁部は大きく開き、内面にはナデ上げ痕がある。大皿である。褐色系である。

p形式・口縁部が外側に向かって開き、端部をつまみ上げる中皿である。黄橙色系である。

q形式・底が上方に突き上がり、内面にナデ上げ痕がある。いわゆるヘソ皿であるが、n形式とは形態的にやや異なる京都系の白色土器である。

r形式・大皿で口縁部は外側に開き、端部をつまみあげる。比較的丁寧に作られている。白色系である。

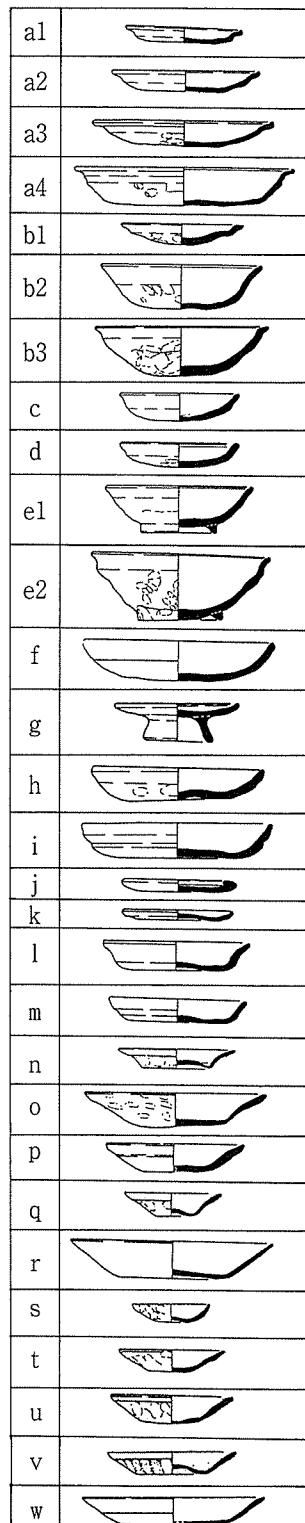
s形式・手づくねで作られた塙皿である。赤褐色系である。

t形式・口縁部が外側に開き指頭圧痕を残すものである。丁寧に作られている。黄橙色系である。

u形式・ナデにより成形されており、指頭圧痕を残すものである。内面の底部と口縁部の境に沈線が入る。黄橙色系である。

v形式・口縁部をヨコナデし、外面に指頭圧痕を残す。上げ底のものである。褐色系である。

w形式・口縁部を広くヨコナデし、指頭圧痕をもたず、丁寧に作られた大皿である。内面に沈線が入る。黄橙色系である。



第168図 土器分類図

長原遺跡（その1）26トレンチ出土土器を指標とする<sup>(18)</sup>。a 1類（1、2）はいわゆる「ての字」口縁を持つものである。平安京では鋤柄編年の「右京二条二坊S X 1」に相当する。10世紀半ばに比定されている。b 1類（3、4）は若干口縁が折れ曲がるようである。c 1類（5、6）は口縁部のヨコナデが強く端部はややつまみ上げる。b 2（10）、b 3（11）類は口縁部にヨコナデを施し、端部は尖り指頭圧痕を残す。a 2～a 4（12～14）類はこれも「ての字」口縁をもつものである。中皿と大皿がある。a 1類同様京都系で器壁は薄く、白色系である。この時期に共伴するものは黒色土器の椀（15、16、18）と皿（19）である。椀には大・中・小の3種類が存在し、15は口縁部に沈線を入れため大和型の祖形となるだろう。これらの黒色土器は近江俊秀氏の第V段階<sup>(19)</sup>に相当する。以上の点からこれらの土器群を10世紀中頃～後葉に位置付けたい。

## II-1期

長原遺跡（その1）SK023出土土器<sup>(20)</sup>を指標とする。a 1類の「ての字」口縁を呈する（20）と、端部のつまみ上げが鈍くなるもの（21、22）が存在する。c 1類は口縁部のヨコナデがゆるくなり、内湾気味の（25）が出現する。また、この時期にはc類ほど深くならない浅い皿状のd類（26、27）が出現する。c、d類はこの後、小皿の中心器種を担うものとなる。またこの時期a 2（33）、a 3（34）類の口縁部は「ての字」の残存形態を呈し、b 1類と同様の傾向を示す。黒色土器（35、36）はI期とあまり形式変化していない。これらの土器は鋤柄編年No.23土壤6、近江氏の第IV段階に相当する。以上の点からこれらの土器群を10世紀後葉～11世紀初頭に位置付けたい。

## II-2期

長原遺跡（その1）旧第4層出土土器を指標とする<sup>(21)</sup>。b 1（40）類は「ての字」が退化してしまう。この時期d類には器壁の薄いもの（44）も出現する。b 2（49、50）類は端部を尖らせる。a 2～a 4（51～53）類の端部つまみ上げは鈍くなる。また、脚のついたg（45、46）類も出現する。黒色土器は小型の椀（56）がまだ存在する。これらの土器は鋤柄編年のNo.67井戸7に相当する。以上の点からこれらの土器群は11世紀前半前葉に位置付けたい。

## II-3期

長原遺跡（その1）SK22出土土器を指標とする<sup>(22)</sup>。a 1（57、58）、b 1（59）類はII-2期と変化は少ない。d（62、63）類は強いヨコナデが施され、外側に開く形態になる。b 2（68）、b 3（69）類は幅広い口縁部にヨコナデが施され、端部を丸くおさめる。a 2～a 4（70～72）類は「ての字口縁」がますます退化し、幅の広いヨコナデを2回に亘って施し、体部には指頭圧痕が看取される。a 1～a 4類は鋤柄編年No.67井戸7とNo.71井戸6の中間に相当するものと思われる。e類はこの時期を最後に消滅する。またこの時期瓦器が出現し黒色土器と供伴する和泉型の瓦器椀（74）は尾上編年I-1に相当する。黒色土器の皿はこの時期まで存在する。森島康雄氏はこの瓦器を11世紀前半以前に比定している。また黒色土器は近江氏のVII段階に相当する。ての字口縁の退化した土師器皿がみられることや、黒色土器などがまだ存在することを鑑みると、これらの土器群を11世紀前半後葉に位置付けたい。

## II-4期

石川流域遺跡H J 98-3区第6層出土土器を指標とする<sup>(23)</sup>。a 1（76、77）類は口縁端部をつまみ上げる「ての字」口縁から上方に折り曲げる受け皿状に変化する。c 1（60、61）類は底部と口縁部の境が不明瞭な皿となる。d（62、63）類は強いヨコナデによって口縁部がやや外反してのびるようになる。この傾向はf（85～87）類にもみられ、（85）のように先端が尖るもの、（86、87）のように丸くおさめるものが現れる。b 2（88）、b 3（89）類はII-3期と比べ口縁端部を丸く納めるよう

I 期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	6	6	6	6	6	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
II 1 期	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
II 2 期	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64
II 3 期	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83
	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83
II 4 期	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102
	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102
II 5 期	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121
	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121

第169図 土師器Ⅲ編年試案 (1)

になる。体部の指頭圧痕が多い。a 2～a 4 (90～92) 類もヨコナデの幅が広くなり、b 2、b 3 類と同様の傾向を示す。これらの土師器皿は前段階同様、鋤柄編年 N o. 67 井戸 7 と No. 71 井戸 6 の中間に比定されるが、各器種の口縁端部の形態などから後出と思われる。また瓦器は和泉型 (93、94) が、尾上編年 I - 2 期に相当する。森島氏はこれを 11 世紀後半に比定している。以上の点からこれらの土器群を 11 世紀後半に位置付けたい。

## II - 5 期

弥刀遺跡第 6 次調査土壙 22 出土弥生土器を指標とする<sup>(24)</sup>。a 1 (95、96) 類の「ての字」口縁は退化し始める。c (100、101) ~ d (98、99) 類はそれぞれ全体的に口縁部に幅の広いヨコナデを施し、いっそう外側に開くようになる。またこれによって c 類と d 類の区別が付きにくくなる。f (104)、b 2 (105)、b 3 (106)、a 2～a 4 (107～109) 類は前段階に比べ、形態的には変化は少ないものの、(106) のように口縁部にヨコナデによる段を持つものが現れる。これは平安京では 12 世紀前半に比定することができる。a 1～a 4 類は鋤柄編年 N o. 71 井戸 6 に相当する。また、瓦器碗は和泉型 (111) が尾上編年 I - 3 期、大和型 (110) は近江編年 I - 2 期に属す。森島氏は和泉型を 12 世紀初頭に比定している。以上の点からこれらの土器群を 11 世紀末～12 世紀初頭に位置付けたい。

## II - 6 期

鬼虎川遺跡第 25 次井戸 12<sup>(25)</sup>、若江遺跡第 27 次井戸 2<sup>(26)</sup>、長原遺跡（その 1）S D 210<sup>(27)</sup>、亀井北遺跡（その 3）S K 8109<sup>(28)</sup>出土土器を指標とする。この時期まで a 1 (112、113) 類は消滅する。代わりにコースター状の j (114、115) 類が出現する。またこれまでの主要であった b (116)、c (117、118)、d (119、120) 類も調整技法や形態の差がなくなるのが特徴である。f (122～124)、h (125、126) 類は前段階と形態的に変化がない。i (127～129) 類は口縁部のヨコナデが強くなり、段を持つもの (128、129) が出現する。j 類の出現は平安京では 12 世紀前半前葉である。瓦器碗は和泉型 (131) が尾上編年 II - 1 期、大和型 (130) が近江編年 I - 3 期に属す。森島氏は和泉型を 12 世紀前半前葉に比定している。ここでは a 類の消滅と j 類の出現を以って一時期設定した。以上のことからこれらの土器群を 12 世紀前半前葉と位置付けたい。

## III - 1 期

鬼塚遺跡第 13 次調査 A 地区土器溜まり<sup>(29)</sup>佐堂（その 1）S E 405<sup>(30)</sup>出土土器を指標とする。この時期新たにごく浅い皿状の k 類が出現する。c 類は神並遺跡の分類から<sup>(31)</sup> c 1 類 (136)、c 2 類 (137)、c 3 類 (138)、c 4 類 (139)、c 5 類 (140) に細分化される。g (141) 類はこの時期まで残る。f (142～144)、h (145、146)、i (147～149) 類は前段階と形態的に変化は見られない。瓦器碗は和泉型 (151) が尾上編年 II - 2 期、大和型 (150) が近江編年 I - 3 期に相当する。森島氏は和泉型を 12 世紀中葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を 12 世紀中葉に位置付けたい。

## III - 2 期

亀井北遺跡（その 3）S D 8146<sup>(32)</sup>を指標とする。k (152) 類はこの時期で終わる。c (153～157) 類は前段階と形態的に変化が見られない。f (158、159)、h (160、161)、i (162、163) 類も同様で (159) や (160) のように若干上げ底になるものも現れる。瓦器碗は和泉型 (165) 尾上編年 II - 3 期、大和型 (164) が近江編年 I - 4 期に相当する。またこの時期瓦器皿が器種分化し、5 タイプに分類される。和泉型と大和型の実年代は若干ズレがみられるようである。森島氏は和泉型を 12 世紀後半前葉に比定している。

以上の点からこれらの土器群を 12 世紀後半前葉に位置付けたい。

## III - 3 期

II 期	112	116	117	118	119	120	122	125	127	130	132
	113	118					123	126	128		
	114						124		129		
	115									131	133
											134
III 期	135	136	137	138	139	140	141	142	145	147	150
	136	137	138				143	146	148		
	137						144	149			
	138									151	
							152	153	156	158	160
							154	157	159	161	162
III 期	152	153	156	157	158	159	160	162	164	166	167
	153	156	157	158	159		160	163	165	168	169
	156						161			170	171
	157						162				172
	159						163				173
							164				174
III 期	171	172	173	174	175	176	177	178	179	181	183
	172	173	176	177	178	179	180	181	182	184	186
	173	176	177	178	179		180	182	183	185	187
	176	177					181	182	184		188
	177						182		185		189
III 期	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200
	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200
	191	192				196	197	198	199	200	201
	192					197		199		201	202
										203	205
										204	206
III 期	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220
	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220
	211	212				215	216	217	218	220	221
	212					216		217		220	221
										222	224
										223	225

第170図 土師器Ⅲ編年試案 (2)

長原遺跡（その1）旧540トレンチ土器溜まり出土土器<sup>(33)</sup>を指標とする。j（171、172）類はこの時期まで残存する。c（173～177）類は前段階と形態的に変化が少ないが、口縁部のヨコナデはやや強くなっている。f類は口縁部が直線状に伸びる（178）とやや「く」の字に外反して端部をつまみ上げる（179）と、内湾気味に立ち上がる（180）がある。h類には口縁部が2段に亘ってヨコナデされ、やや「く」の字に折れ、外面に指頭圧痕があるもの（182）が出現する。i類は平安京では12世紀後半後葉に出現する。瓦器碗は和泉型（187）が尾上編年Ⅲ－1期、大和型（186）が近江編年Ⅰ－5期に相当する。森島氏は和泉型を12世紀後半後葉に比定している。以上のことからこれらの土器群を12世紀後半後葉に位置付けたい。

#### III－4期

神並遺跡ⅠS E 02出土土器<sup>(34)</sup>を指標とする。c（190～194）類は前段階と形態的な変化が少ない。f（195～197）、h（198、199）、i（200～202）類とも前段階と大差ないが、やや小型な（196、198）が出現している。（200）は口縁部のヨコナデが強くなっている。瓦器碗は和泉型（204）が尾上編年Ⅲ－2期、大和型（203）が近江編年Ⅰ－6期に相当する。森島氏は和泉型を12世紀末～13世紀初頭に比定している。以上のことからこれらの土器群を12世紀末～13世紀初頭に位置付けたい。瓜生堂廃寺第1次基壇整地土がこの時期に相当する。

#### III－5期

若江遺跡第29次調査土器溜まり、<sup>(35)</sup>神並遺跡ⅠS K 22<sup>(36)</sup>出土土器を指標とする。c（210～214）類はやはり前段階と形態的な変化は少ない。f（215、216）、h（217、218）、i（219～221）類も形態的には前段階と大きな変化は見られないが、全体的に小型化し、大皿というより中皿が多くなる。口縁部がヨコナデにより立ち上がり端部をつまみ上げる。瓦器碗は和泉型（223）が尾上編年Ⅲ－3期、大和型（222）が近江編年Ⅰ－6期に相当する。森島氏は和泉型を13世紀前半中葉に比定している。瓜生堂廃寺第1次基壇周溝がこの時期に相当する。以上のことからこれらの土器群を13世紀前半中葉に位置付けたい。

#### III－6期

矢作遺跡SD 14出土土器<sup>(37)</sup>を指標とする。c（230～234）類にはやはり前段階と形態的な変化は見られないが、（230）のようにやや上げ底気味になるものも現れる。f（235、236）、h（237、238）類も前段階と変化はないが、i（239～241）類は口縁部がやや内湾して立ち上がり、端部をつまみ上げるようになる。両者の形態的な差異はほとんど無くなる。瓦器碗は和泉型（242）が尾上編年Ⅳ－1期に相当する。森島氏はこの形式を13世紀前半後葉に位置付けている。以上のことからこれらの土器群を13世紀前半後葉に位置付けたい。瓜生堂廃寺第2次墓壇整地土がこの時期に相当する。

#### IV－1期

水走遺跡第2次鬼虎川塚遺跡第20次No. 4トレンチSK 17出土土器<sup>(38)</sup>、河内寺跡第5次SK 3出土土器、<sup>(39)</sup>を指標とする。コースター型のj（244）類はこの時期まで残存するが、口縁部をやや内側に折り曲げ、やや上げ底となる。c（246～250）類はやはり前段階と形態的な変化は少ないが、上げ底気味となる。f（251～253）、h（254、255）類も前段階と変化はない。h類は口縁部のヨコナデが一層強くなり端部を内側に折り曲げ、上げ底となる。またこの時期、口縁部をヨコナデにより「く」の字に外反させ、端部をつまみ上げ、上げ底となる。i（256）類と、口縁部の中程にヨコナデによる段を持ち、端部が直線状に伸びるi類は既に出現している。瓦器碗は和泉型（259、260）が尾上編年Ⅳ－2期、大和型（261）が近江編年Ⅱ－1期に相当する。森島氏は和泉型を13世紀後半前葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を13世紀後半前葉に位置付けたい。瓜生堂廃寺周溝はこの時

III 6 期					
	228	230	233	235	239
	229	231	234	236	237
					240
					241
					242
					243
IV 1 期					
	244	246	249	251	256
	245	247	250	252	257
					255
					258
IV 2 期					
	262	265	267	269	271
	263	266	268	270	
IV 3 期					
	272	275	277	279	281
	273	276	278	280	282
V 1 期					
	283	285	290	292	
	284	286	291	293	
V 2 期					
	295	297	301	303	
	296	298	302	304	
					305

第171図 土師器皿編年試案（3）

期に掘削され、15世紀頃まで存在する。

#### IV – 2 期

西ノ辻遺跡第9次溝21<sup>(40)</sup>、同土壙1<sup>(41)</sup>出土土器を指標とする。c (262~266) 類は口縁部を外側に開き、一層浅く小型になる傾向を示す。この時期f、h、i 類は少くなり、新たに口縁部と底部の境が不明瞭なm類 (267) が出現する。l 類 (270) は口縁部につまみがなくなり、外側に伸びる様相を示す。瓦器碗は和泉型 (271) が尾上編年IV – 3期に相当する。森島氏は和泉型を13世紀後半後葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を13世紀後半後葉に位置付けたい。

#### IV – 3 期

西ノ辻遺跡第9次土壙1<sup>(51)</sup>出土土器を指標とする。c 類 (272~276) は小型化し、口縁端部に強いヨコナデを施し、尖り気味になる。f 類も一層小型化する。l (280) 類も口縁部に強いヨコナデを施し、外反するようになる。瓦器碗は和泉型 (282) が尾上編年IV – 4期、大和型 (281) が近江編年II – 2期に相当する。森島氏は和泉型を14世紀前半前葉に比定している。以上の点からこれらの土器群を14世紀前半前葉に位置付けたい。

#### V – 1 期

水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次調査No. 4 トレンチ包含層<sup>(42)</sup>出土土器を指標とする。この時期いわゆるヘソ皿のn 類 (284、294) が出現し、新たな器種として加わる。しかし前時代的なc 類も未だに存在し、この時期を境に土師器皿の様相が変化するといえる。なおf (291)、l (290) 類は口縁部のヨコナデが一層強くなり、外反して開くようになる。n 類は平安京では14世紀の前葉には出現している。瓦器碗が消滅しているため、年代決定は難しいが、前後の時間的な様相から考えて、これらの土器群を一応ここでは14世紀前半前葉に位置付けたい。

#### V – 2 期

水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡20次調査No. 4 トレンチ S K 14出土土器<sup>(43)</sup>を指標とする。この時期の資料は非常に少ない。c (297~300) 類は数を減らし、主体はn (296、305) 類に変化してくる。中皿も同様の傾向にある。また、口縁部を水平近くまで外反させ、端部をつまみ上げるo (304) 類も出現する。o 類は平安京では14世紀末に出現する器種であり、この土器群の中では新しい様相を示す。以上のことからこれらの土器群を14世紀後半後葉に位置付けたい。

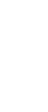
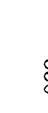
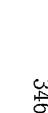
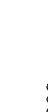
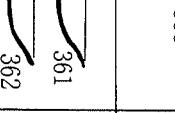
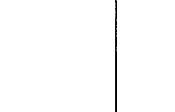
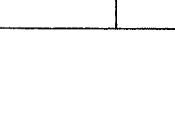
#### V – 3 期

石川流域K T 92-1、S X 01<sup>(44)</sup>出土土器を指標とする。c 類 (308、309) はヘソ皿に近くなる。i (310)、l 類もn (312、313) 類に変化し、形態差があまりなくなり、指頭圧痕を多く残すようになり、上げ底気味となる。瓦器碗は天野山金剛寺遺跡<sup>(45)</sup>の編年では1 類に分類できよう。以上の点からこれらの土器群を15世紀前葉に位置付けたい。大溝1 はこの時期に掘削されたと考えられる。

#### V – 4 期

客坊山遺跡第2次D地区土器溜まり<sup>(46)</sup>出土土器を指標とする。この時期、京都系の白色土器であるq (316、317) 類が出現する。ヘソ皿である。q 類は平安京では14世紀の前葉には出現しており、中南河内地域とは様相を異にする。またc (318~321) 類はこの時期まで残存し、口縁部と底部の境が無くなり、一種類のみとなる。n 類 (324~326) も口縁部に強いヨコナデを施す指頭圧痕をのこす。また、口縁部が大きく開き、端部をつまみ上げる。r 類が出現し、これ以降口径を大きくし大皿化していく。瓦器碗は最終末となりこれ以降は見られなくなる。この時期には最終末の瓦器が伴う。以上のことからこれらの土器群を15世紀前葉から中葉に位置付けておきたい。

#### V – 5 期

V 3 期	 306	 308	 310	 312	 314
V 4 期	 316	 317	 318	 319	 320
V 5 期	 321	 322	 323	 324	 325
V 6 期	 331	 332	 333	 335	 336
VII 1 期	 345	 346	 347	 348	 349
VII 2 期	 354	 355	 356	 358	 359
 360					
 361					
 362					
 363					
 364					
 365					
 366					
 367					
 368					
 369					
 370					
 371					
 372					
 373					
 374					
					

第174図 土師器Ⅲ編年試案 (4)

若江遺跡第44次落込み1<sup>(47)</sup>出土土器を指標とする。この時期q(331)類は指頭圧痕を外面に残す。c(335、336)類はまだ残存している。n(332~334、339~341)類は中皿(339~341)が口縁部のヨコナデを一層強いものとする。またo(342)、r(343、344)類も口縁部が外に向かって開くようになる。以上の点からこれらの土器はn、o類の形態などから15世紀中葉に位置付けたい。

#### V-6期

若江遺跡第38次調査出土土器<sup>(48)</sup>を指標とする。小型器種はn(347~349)、q(345、346)類となる。中皿・大皿もv類とr(353)類のみとなる。この時期に新しくv(350~352)類が出現する。外面にヨコナデを施し、指頭圧痕を残す。上げ底である。土師器皿が中世的な様相を示すのはこの時期までである。これらの土器群は供伴する瓦質土器などから15世紀後半に位置付けられる。

#### VII-1期

弥刀遺跡第6次調査溝12出土土器<sup>(49)</sup>、古市遺跡群III S E-01<sup>(50)</sup>を指標とする。小型器種はn類(358)の他に手づくねで作られていっそう小型のs(360)類や、やや丸底で丁寧なナデによって成形されるt(355~357)類が出現する。またr(361~363)類は口縁端部を丸くおさめるものとなり、全体的な器種が変化を遂げる。これらの土器は平安京では16世紀前半に出現することから、同時期に位置付けておきたい。

#### VII-2期

若江遺跡第38次調査小堀出土土器<sup>(51)</sup>を指標とする。この時期新たに中皿のu(371~373)類が出現する。内面はそれまでのナデ上げ痕から沈線へと変化する。t(366~368)類同様丁寧なナデによって成形され、口縁部と底部の境が不明瞭である。またこの時期o類の他に口縁部をヨコナデし、指頭圧痕をもたないw類が出現する。w類の内面はt類同様沈線が入る。他の器種は前段階とは変化が見られない。n類はこの時期まで残る。これらの土器群は共伴する。他の土器や陶磁器から16世紀後半に位置付けておきたい。

#### まとめ

これまで10世紀中葉から16世紀後半までの土師器皿の変遷を見てきたが、ここではI~IV期までの設定基準となった器種組成について簡単に述べておく。

まずI期はa1~a4類などの「ての字」口縁が存在する時期である。

II期はその「ての字」口縁が崩壊していく過程である。III期はコースター型のj類が出現し、ての字口縁が消滅する。c類が細分化される。しかし c類はその後この時期を通じてどの器種も形態的に変化はしない。また、c類のような小型器種ばかりではなく、a2~a4、b2、b3、f類も同様の傾向にある。III期は土師器皿の変化の乏しい時期である。

IV期は全器種にわたって口縁部に強いヨコナデを1、2回施すことにより成形する。

V期はj類が消滅し、c類が前段階に比べ比較的浅い傾向を示す。またa2~a4、b2、b3、f類の他にh、i、l類が出現する。口縁部のヨコナデは一層強くなり各器種とも外側に開くようになる。

V期はn類のような雑なつくりのヘソ皿や上げ底になる器種が出現する。また、口縁部を水平近くまで折り曲げ端部をつまり上げるo類が出現するのも特徴である。o類は中南河内では

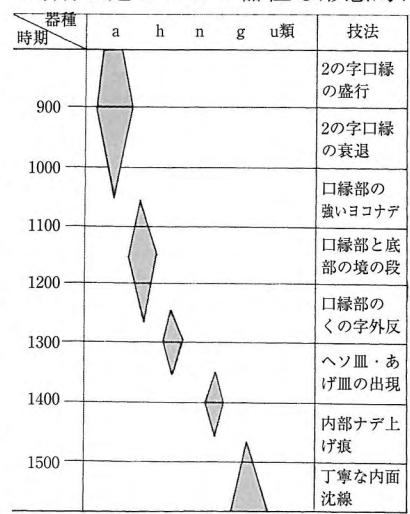


表13 各時期における成立技法の変遷

近世になつても存在する器種である。

VII期はそれまでになかったs、t、u類がそれまでの全ての器種に変わって登場する時期である。土師器皿は近世的な様相を示している。以上のことと模式化すると表7のようになる。10世紀後半までは「ての字」口縁の盛行、その後、11世紀前半～12世紀前半までの間に退化してしまう。12世紀後半～13世紀前半にかけて一様に口縁部に強いヨコナデを施すようになり、それが13世紀後半～14世紀前半にかけて口縁部が「くの字」に外反するようになる。その後平安京より内面にナデ上げ痕があるヘソ皿、上げ底の器種が入り、この地域も平安京と同様の変化を遂げる。しかし15世紀後半にはそれまでの器種は少なくなり、ナデ上げ痕から内面沈線へと変化し、丁寧なナデ成形による近世的な土器群が出現するといえる。

#### おわりに

本稿では中・南河内における土師器皿の編年を試みたが、十分に目的を達したとは言えないであろう。この地域においては年代決定の基準となるのは瓦器であることは今も変わりない。今回の編年をしていく上で困難を極めたのは形態的変化のない13、14世紀の土器群と瓦器が消滅した15世紀以降の土器群であった。特に14世紀後半の良好な一括資料の中で管見に及ぶものは少数であった。今後資料の増加を待って再考を加えてみたい。

#### 注

- 1) 尾上 実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』 1983年
- 2) 近江俊秀「大和型瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号 1991年
- 3) 森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会 1992年
- 4) 横田洋三「出土土師器編年試案」『平安京跡研究調査報告』第5輯（財）古代学協会 1981年
- 5) 宇野隆夫他『京都埋蔵文化財調査報告』Ⅱ 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981年
- 6) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ 1981年
- 7) 伊野近富『「葉椀」「葉皿」考』『京都府埋蔵文化財情報』第5号 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
- 8) 横田洋三「付論 土師器皿（Bタイプ系）の器形、規格の変化と製作技術について」『平安京跡研究調査報告』第12輯 （財）古代学協会 1984年
- 9) 横田洋三「土師器皿の分類と編年観」『平安京左京四条三坊十三町』 （財）古代学協会 1984年
- 10) 鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会 1985年
- 11) 伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 12) 鋤柄俊夫「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』 （財）古代学協会 1994年
- 13) 小森俊寛、上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 （財）京都府埋蔵文化財調査研究所 1996年
- 14) 拙稿「右京五条三坊八町出土の中近世土器について」『平安京左京五条三坊八町』 （財）古代学協会 1997年
- 15) 森島康雄「西ノ辻遺跡周辺における中世土器の編年」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・IV』 大阪府教育委員会 1987年
- 16) 中井淳史「室町・戦国期における近畿地方の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』XIV 日本中世土器研究会 1999年

- 17) 瀬戸哲也他『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター 2000年
- 18) 畠 暢子他『河内平野遺跡群の動態Ⅷ』南遺跡群、古墳時代中期以降編 大阪府教育委員会 (財)大阪府文化財調査研究センター 2000年
- 19) 近江俊秀、岡田清一「河内中南部における古代末期から中世土器の諸問題」『八尾市文化財紀要』4 八尾市教育委員会文化財室 1989年 (以下、黒色土器についても近江氏の編年を用いる。)
- 20) 注18に同じ
- 21) 注18に同じ
- 22) 注18に同じ
- 23) 上田 瞳「H J 98-3 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』X V 藤井寺市教育委員会 2000
- 24) 才原金弘他「弥刀遺跡第6次調査報告書」『埋蔵文化財発掘調査概報集-1998年度(2)-』(財)東大阪市文化財協会 1999年
- 25) 福永信雄『鬼虎川遺跡第25次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1998年
- 26) 才原金弘『若江遺跡第27次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会 1988年
- 27) 注18に同じ
- 28) 注18に同じ
- 29) 福永信雄『鬼塚遺跡第13次(遺物編)15次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1999年
- 30) 注18に同じ。
- 31) 下村晴文『神並遺跡』I 東大阪市教育委員会(財)東大阪市文化財協会 1986年
- 32) 注18に同じ。
- 33) 注18に同じ。
- 34) 注31に同じ。
- 35) 上野利明他『若江遺跡第29次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1989年
- 36) 注31に同じ。
- 37) 原田昌則「I 矢作遺跡(第1次調査)発掘調査概報報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』平成元年度 (財)八尾市文化財調査研究会 1989年
- 38) 才原金弘他『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1992年
- 39) 菅原章太「河内寺跡第5次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』1998年度(2) (財)東大阪市文化財協会 1999年
- 40) 福永信雄『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1996年
- 41) 注40に同じ。
- 42) 注38に同じ。
- 43) 注38に同じ。
- 44) 新開義夫「K T R 92-1」『石川流域遺跡群発掘調査報告』藤井寺市教育委員会
- 45) 芦本隆裕・才原金弘『客坊山遺跡群第2次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会 1998年
- 46) 尾谷雅彦他『天野山金剛寺遺跡』河内長野市遺跡調査会 1994年
- 47) 才原金弘『若江遺跡第44次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会 1993年
- 48) 福永信雄『若江遺跡第38次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1993年

- 49) 註24に同じ。
- 50) 笠井敏光他『古市古墳群』Ⅲ 羽曳野市教育委員会 1982年
- 51) 註47に同じ。
- 52) 今回編年を試みた13世紀代の土師器皿の小皿は13世紀の中では形態的な変化が追えないものであったが、古い様相を示すものは全体的に厚く、端部に面を持つものから薄く、端部を丸く納めるものに変化するという特徴がある。なお中、大皿は14世紀に近づくにつれて、口縁端部を強くヨコナデし、やがて「くの字」に折れ曲がる様になる。また13世紀代の土師器皿の暦年代については森島康雄氏による論考がある。その中で森島氏は伊野編年と小森・上村編年に誤差があることを指摘し、瓦器碗による年代から内膳町遺跡の新たなる年代観を示した。

一方、14世紀後半の資料は管見に及ぶものは少なく、また瓦器碗が南河内の中で一部の地域に残ることから各報告者によって若干編年観が異なることも問題となろう。終末期の瓦器碗がどの地域でどのくらい残るかは今後の課題である。また14世紀後半の資料は少ないとから遺構の数が減ることも考えられる。さらに筆者のV期に京都系のヘソ皿や大皿が出現するが、なぜこの時期に河内において京都形の土師器皿が出現するのか等問題が残った。また河内の土師器皿を編年する際には瓦質土器や土師質羽釜などの年代のクロスチェックも必要であると痛感した。今後はこれらの点に留意し、改めて考察を加えてみたい。なおこれらの問題点については森島康雄から数々の御教示を得た。

森島康雄 「瓦器碗編年からみた京都系土師器皿の年代観」 『中世土器研究論集』 中世土器研究会 2001年

#### 補記

これまで述べて来た事実記載と考察については下記の文献を参考にした。

近江俊秀「大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号 (財)古代学協会 1991年

森島康雄「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会 1990年

横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年

森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986年